

徳富蘇峰記念館

目録 — (17)

蘇峰とその時代展——大正編

展示期間◇平成十二年一月五日〜十二月二十日

はじめに

大正時代は一九一二年から一九二六年の十五年間、蘇峰にとっては五十歳から六十四歳の壮年時代である。大正時代は現在までに十六回行ってきた特別展で「明治・大正絵葉書展」としてとりあげただけで、大正期を主題にした展示は行つたことがない。何故かと考えて見ると、蘇峰にとって明治時代四十五年、昭和時代三十二年間は、それぞれが変化に富んだ時代であり、史料の一つ一つが自己主張し、興味あるテーマが沢山ありすぎたことによる。そこで今年は大正時代と向き合ってみよう。五十歳から六十歳というとき、第二の人生のスタートをきる時期でもあつたらうが、蘇峰の精神も肉体もほろほろの状態であつたようで、手当が必要であつた。昭和十年、中央公論社から出版された『蘇峰自伝』と当館の資料によつてみよう。

蘆花の助け成らず

明治三十四年から十年にわたる政治家桂太郎の影武者としての働きは、蘇峰にとって苦勞も多かったようだ。憲政擁護、桂内閣弾劾運動によつて、「国民新聞」は「桂の御用新聞」「憲政の賊」とまで言われ、第二の焼討事件にあつた。大正二年二月二十一日、桂内閣は総辞職した。大正二年十月十日、桂の死後、蘇峰は政界から離れ、新聞事業に専心した。しかし「国民

新聞」の発行部数は二十三万部からたちまち三割も減少した状態になつた。「国民新聞」建直しのため、良い策はなかつた。蘇峰は蘆花との仲を復活し、蘆花の小説の連載に望みをかけた。蘆花の小説「十年」の予告が「国民新聞」に掲載され、社員一同喜んでいたやさき、「十年」は十一回で突然中止された。蘇峰はその知らせを京城(ソウル)で聞いた。蘇峰は日記(「兩京往復雜誌」)に次のように書いてある。「六月十九日午前二時、電報伊達氏より来る。十年、中止二件也。人心恃む可らず。恃む可きは唯た我心のみ。予、此の夜より発足せんか(帰ろうか)と思ひしも、寧ろ二十日後の事予定の通りにす可として其俟就寝。欄外一十九日夜の事也。五時過、諸方に予約取消しの電報を發し、且伊達氏に指令す。寺内総督に暇乞且要件を談」大正二年十月二十二日に、朝鮮を旅行していた健次郎、愛子夫人、養女鶴子(蘇峰の六女)が京城に來たことを、蘇峰は手紙で父に次のように報告している(大正二年十月二十八日付)

健次郎一行も二十三日到着し私儀は二十二日夜着し以來二十六日朝出發迄、私自から案内見物等為致、買物等は社員を付け遣はし、且又寺内伯、明石中将などにも私同伴仕候。当人共に於いては果して満足候哉否は不文明に候得共、左様御聞置被下度奉願上候。

この時、蘇峰は「合資会社京城日報社建設」の契約のため、大変忙しい時であつたが、手紙にあるように、精一ばい弟一家をもてなした。しかし健次郎がそれを喜んで蘇峰に感謝して帰つたかどうかわからない。二人の間に何があつたのか書いていないが、この後兄弟は十五年にわたる絶交にはいり、大正三年五月二十六日、父一敬が九十三歳で死去した時も蘆花は葬式にも出席しなかつた。

第二回焼討(二月十日)後の蘇峰

「大正二年の第二回焼討ち以後の予ほど、精神的に惨めであることを感じた事は、前にも、後にも殆どその例がなかつた。今日から想出しても尚ほ此の身がぞくぞくして、膚に粟を生ずるほどだ」と語っている。このような蘇峰の泣言は、他に読んだことがない。それは何であつたのか。

1 明治二十年「国民之友」、二十三年「国民新聞」発刊以来の疲勞。

2 明治三十四年第一次桂内閣の組閣以来、多年政界における、いわゆる

自由労働者としての長い生活の疲労。一つが一時に発生したものだという。

政界との絶縁と修史素志

大正二年七月、心身の疲労を癒すため、蘇峰は平福百穂と富士山麓御殿場の青龍寺で一カ月休養し、静養中に新たな生活を始めることを考えた。十一月『政治家としての桂公』を中央公論に掲載した。十二月『時務一家言』を国民新聞に掲載した。桂太郎は大正二年十月十日逝去。蘇峰は実際の政治から全く縁を切った。

大正三年五月、父淇水の死。大正三年から修史『近世日本国民史』を始めようとしていたが、父の死後、蘇峰は生ける屍同様になった。しかし大正三年から、実際に修史にとりかかった大正七年までに、蘇峰は膨大な量の大作を次々に出版した。それは失ったものへの哀悼の意であったのかもしれない（大正期の著書は10頁別表を参照されたい）

大正七年七月一日より『近世日本国民史』を国民新聞紙上に連載しはじめた。

大正七年七月「京城日報」の監督の職を決然として去る。寺内正毅との意見の相違による。京城日報の監督は、明治四十三年九月より大正七年七月まで約八年間の勤めであった。そのあいだ、朝鮮をくまなく旅行し、朝鮮諸名士と交際を結んだ。李冠用、宋乗峻、趙重応、李峻鎔ら他多くの文人が送別の詩を書いて別れを惜しんだ。

大正八年盲腸炎の大手術、再手術をおこない、後、湯河原で静養。大正十二年九月まで逗子に滞在。時々上京するという生活であった。

大正十年五十九歳の時、二十余年住んだ青山邸宅地を全部提供し、明治神宮参道の前に「(財) 青山会館」の設立を企画。その主旨を国民新聞に発表。還暦の祝いに寄付集まる。

大正十二年国民教育奨励会の創立。「国民新聞」一万号の記念事業。

大正十二年五月『織田氏時代』三冊、『豊臣氏時代』七冊に対し、帝国学士院より恩賜賞を授与される。

大正十二年六月十二日朝野名流相集まって恩賜賞授与の祝賀会を帝国ホテルで開催。清浦奎吾、後藤新平、野田大塊らの主唱で開かれた。箕浦勝人、高橋是清、加藤高明、与謝野鉄幹、与謝野晶子、吉屋信子など千人余集まる。

大正十二年九月一日、関東大震災。大きな被害をこうむるが、胸を病んでいた次男徳富萬熊の責任ある行動に喜びを感じた父親蘇峰であった。

大正十三年五月大森山王草堂落成、仮住まいから移住する。

大正十三年九月十六日、後継者と期待していた次男萬熊がチフスのため伝染病研究所の付属病院で死去。

大正十四年三月十九日『国民小訓』出版記念祝賀会が開かれる。五月青山会館において第一回歴史講座「歴史及び歴史家」講演。六月帝国学士会員になる。

大正十五年一月、宮中御進講控えとして出仕する。三月「歴史家としての頼山陽」。四月歌舞伎座で国民新聞社新築披露会を開く。朝野の名士三千余名参会する。田中光頭伯の推薦と堀内良平の周旋で東武電鉄の根津嘉一郎の出資を仰ぎ、国民新聞社を資本金三百万円の株式会社組織とし、経営をその手にゆだねる。編集を圧迫され、経営不振は深刻化する。

大正時代の蘇峰は桂太郎・父淇水・母久子・次男萬熊を失う。大病をし、大作の著作を残し、『近世日本国民史』を起稿し、着々と書いていった。

蘇峰の京城日報の監督の任は約八年で終わった。修史事業は大正七年七月から始まった。大病と関東大震災は避けようのないものであった。学士院からの恩賜賞は大きな喜びであった。大正時代から昭和四年に向かつて、ジャーナリスト蘇峰にとって、経営か、内容か苦しい選択の時代であった。弟との絶交は昭和二年、伊香保の病室で、蘇峰と蘆花の握手で終わった。国民新聞の経営の不振という試練を、書く事と、読書で乗り越えたのである。そして言論人・文学者・修史家として、六十四歳の蘇峰は昭和を迎える。以上簡単に大正時代の私的蘇峰を追ってみたが、蘇峰の生活は、悲喜こもごも、失った悲しみが強く胸を打つ時代であったように感じる。蘇峰の末娘矢野鶴子さんが、蘇峰の思い出を語って下さった中で、次の事が心に残った。「このごろになって初めて食べ物の味がわかる」と老人になられた蘇峰が云われたという。壮士が来たり、電報が来たり、新聞記者であった蘇峰は神経を酷使していたので、味覚から味わう幸せな時を、失っていたのであろう。それが鶴子さんのお話から、どんと伝わってきた。

京城日報関係資料

(明治四十三年十月一日から大正七年六月二十九日)

京城日報の監督就任は明治四十三年十月一日であった。蘇峰は就任時に「形式は合併、名称は京城日報、社員は現状維持、引継譲受には立合を要す。社長新任の宣言、前途拡張の予告」とメモしている。以後蘇峰は年に二、三回京城に通った。初代朝鮮総督寺内正毅とはだんだん気があわなくなり、大正七年六月二十九日「京城日報との決別覚書」が蘇峰自筆で残されている。阿部充家社長宛「小生は本月限り京城日報監督を辞任せり。諸君各位が多年小生監督の下に忠実に勤勉せられ、京城日報、毎日申報が現在の隆運を見るに至りたるは、小生中心より各位に感謝する所也。今決別に際して各位の健康を祈る」。大正七年八月米騒動起る。蘇峰は「閣臣の責任を問」を「国民新聞」に発表し、寺内内閣の責任を追及。京城日報との関係を断つ。この他正式文書、寺内に対する「意見書」「契約書」などの書類は、「京城日報」関係資料として『徳富蘇峰記念館所蔵民友社関係資料集別巻』(三一書房・一九八五)に収録してある。

大正デモクラシーと吉野作造

大正デモクラシーといえは、「吉野作造」とその名がでるが、当館は作造の蘇峰宛書簡十二通を所蔵している。吉野の大正デモクラシーは、民主主義の運動に大きな影響を与えたといわれる。教科書の中の吉野作造と第二次世界大戦下の蘇峰は、すぐには結びつかないが、作造は十五歳年上の蘇峰に親しみのある手紙を書いている。吉野作造と蘇峰の出会い、海老名弾正の明治四十二年九月四日付の書簡に見られる。

海老名弾正が蘇峰に吉野作造を紹介するという書簡で、蘇峰は吉野にすぐに面談した。海老名は蘇峰に礼状を出し、その中に、「一方ならぬ御配慮を忝うし、御蔭にて出発の準備相整い候」と喜んでいる。出発とは、明

治四十三年四月に、吉野がドイツ、イギリス、アメリカに政治学の研究のために留学することをさしている。かつて明治三十九年、二十九歳の吉野は中国に渡り袁世凱の息子克定の家庭教師となったが、留守宅への給料の払いが悪かった。七人の子供があり、家庭思いの吉野にとって、心配なことであった。給料の払いのことは、吉野から弾正、弾正から蘇峰に、蘇峰から当時の通信大臣後藤新平へと伝えられ、後藤の一言で吉野は安心して外国に留学できることになった。年譜に「一年間五百円三年間千五百円を後藤新平より援助される」とあるので、このことであろう。田中惣五郎の「吉野作造」の本文に推察通りの内容があったので紹介しよう。

「中国での給与ぶりの不安定な経験を持つている以上、第一に気になったのは生計費であった。このことを心の師であった海老名弾正にはかつたところ、海老名は同郷の徳富蘇峰に語り、蘇峰はさらにこれを後藤新平に相談した。後藤は当時第二次桂内閣の通信大臣兼鉄道院総裁兼拓殖総裁として、副首相的立場で、いわゆる大風呂敷を広げていた時代であった。海老名と徳富はキリスト教関係でつながり、その蘇峰は明治二十年代の進歩的立場を捨て、当時は桂太郎の政治的顧問ともいふべき立場にいたしたらこのルートは十分に理解されるであろう」。

吉野作造の書簡を紹介しよう。大正五年六月二十一日付

謹啓仕候 昨日は突然多勢罷出 御多忙にも不拘 種々御懇篤なる御高話承り 一同至大の満足を感じ候 厚く御礼申述候様依頼も有之 不取
略儀茲に御芳情を奉謝候 山川 海老名両君にもよろしく奉願候

五年六月二十一日 頓首

徳富先生 御史 吉野作造

突然に大勢で押し掛け、高話を聞いてみな満足したと書いているが、どんな人たちを連れていったのであろうか。この書簡の封筒は「東京帝国大法学科大学 吉野作造」と印刷されている。当時作造は法学部の教授であったので、同僚か学生を連れていったのではなからうか。「中央公論」の大正五年一月号に吉野の論文「憲政の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」が掲載された。五月号には「文壇に復活せる徳富蘇峰」、六月号

には「吉野作造論」が掲載されている。蘇峰と吉野と学生たちは、豊富な話題で話し合ったのであろう。吉野作造の生涯のなかで、もつとも輝いていた時代に、蘇峰のところに同僚、学生を連れてきて、蘇峰の話に大満足したということは、蘇峰への書簡が残っていたからこそ、解ったことである。

もう一つ面白い話は、明治十六年蘇峰二十一歳のとき、それは大江義塾を開いて一年後、蘇峰は「官民調和論」を書き、大江逸のペンネームで印刷、少部数が出版された。吉野は大江逸が蘇峰の号と知らずに買い、四十六年後に蘇峰の著作であるとわかったという。吉野は蘇峰の論文を、早い時期から、愛読していたことになる。吉野作造と蘇峰の家庭的な面で似ているところは、早婚で子供が多かったという事である。蘇峰は四男六女の子持ち、作造は七人の子持ちであった。蘇峰が娘のために、吉野に候補者を紹介してくれと頼んでいたことがわかる書簡もある。

関東大震災と国民新聞のゆくえ

大正といえば「関東大震災」をすぐに思い出す人が多い。この時遷都論もおこった。大正十二年九月一日、関東大震災で、国民新聞社は、民友社出版部、および印刷部を全焼した。大震災を逗子で受けた蘇峰は三日、徒歩で上京した。事務所を帝国ホテルに移し工場を博文館工場に移し、休むことなく新聞を発行し、「国民新聞死せず」の一文を掲げた。蘇峰にとつて震災の大打撃は尾をひき、昭和四年一月の国民新聞社から引退する直接の原因となった。遷都論には反対らしく、天然の災害ばかりを気にしているても、空から爆弾を浴びるといふ危険もあるのでは、と地震だけが、東京市の条件に不的確な条件にならないという意見であった。

人見一太郎 大正十二年九月三日付書簡

只今新聞(号)外により国民新聞社焼失の事を知り驚入申候。実に以て御気の毒千万に奉存候。今回の天災は天下の人心を根底より動揺するの前提となるやも知れずと存申候。徳富老兄玉几下 九月三日 一太郎

大谷光瑞 大正十三年一月十五日付書簡 星加坡路廿五号 上海より

拜啓 益御清穆奉賀候 一月十日付御書簡難有拜見仕候 小生錦地参上ノ節事業家ニ一講演を致スベキ思召拜承仕候 然シナガラ実ハ前便ニ申上候通 小生ハ絶対ノ遷都論ニテ山本内閣ノ為ニ緘口セラレ居候故 不得止沈黙致居候次第二テ 東京復興ニ関シテハ何等ノ考モ無之候間 此ノ事ダケハ先生の御命令ナガラ御断り申上候(後略)

大谷光瑞と徳富蘇峰

大谷光瑞は蘇峰より十二歳若い。西本願寺の第二十二代の法主で、明治三十五年、日本で最初の西域探検を試みた人物である。当館には光瑞からの二百四十通の書簡がある。

第一期 明治から大正三年まで二十八通

第二期 大正三年から大正十五年まで二百五通

第三期 昭和七通

光瑞は、日清・日露戦争・西域探検・二楽荘建築・武庫中学などに出費をしすぎ、西本願寺法主の座を追われ、中国、アジアを旅し、また居住したボヘミアンであった。アジア各地から蘇峰へ送られた多くの書簡は、情報沢山詰まっている。光瑞は寺内内閣に期待していたが、寺内の対支政策に失望し、次の原内閣に期待し、また失望している。光瑞は蘇峰に「帝国の危機」といふ私見を大正八年四月に送った。それは早速大正八年八月、民友社から出版された。光瑞は同じ題の論文を中央公論社に送り、それは大正六年『中央公論』三月号に掲載された。そしてすぐに四月号で吉野作造の「大谷光瑞師の「帝国の危機」を読む」によって駁論された。吉野は光瑞の論文に価値を認めることはできないとしている。光瑞の誠心誠意国を念う気持ちに敬服するが、此の論文は熟慮、精察の結果ではないと思う。そして光瑞が海外に放浪しているのは、決して国民の期待していることではなく、浅薄な軍国主義の唱道など心外千万なことであると論じている。寺内正毅や吉野作造は光瑞の意見を暴論、放言とかたづけられているが、蘇峰は「事件突発の際に出来したる一時的のものにして、永久的価値あるや

否やは問題であるが、然も時代を知るの資料としては是又見逃す可からざる重要な文献である」とみていた。この蘇峰の見方こそ、光瑞が蘇峰に多くの意見を送らせる原動力となったものであらう。

萬熊の死

蘇峰には男四人女六人の子供がいた。長生きをすると嬉しいときも、悲しい時も、沢山ある。大正十三年九月十六日、蘇峰が国民新聞社の後継者と期待していた次男萬熊がチフスのため、東京白金の伝染病院で死去した。三十三歳であった。蘇峰の衝撃は大きかった。

父を失って以来の予は、淋しき人であり、子を失って以来の予は味気無き人である。実を云へば新聞経営に関する、興味も、執着心も、半ば以上、万熊の遺骸と共に、土中に葬つたる心地がした。併し彼が総てのものを「国民新聞」に捧げたる熱誠を思ひ、せめて彼の亡魂を慰むる為に、予も今一肩入れねばなるまいと思ひ、力めて自から撰生して、漸く社務に従事するに至つた。併し正直の処それ以後の予は、全く前日の予では無つた。

蘇峰への慰めの手紙を見てみよう

嘉悦 孝 大正十三年九月五日付書簡

今朝の新聞 涙なしには拝見出来ず 志かもそれをくりかえし拝見いたし候 何と申天のいたずらにやと御同情に堪へ不申 とりあへずここに謹んで御弔詞申上候 頓首

大正拾参年九月五日 嘉悦 孝

徳富猪一郎様

同 静子様

母よりもくれぐれよろしく申上候やうとの事に御座候 これもそばにて大なきに御座候

内村鑑三 大正十三年九月廿日付書簡

拜啓 国民新聞紙上にて御不幸の由承り、御同情に不堪候。親が子を失ふの悲痛は人生最大の悲しみに有之 御両親様の御心中幾重にも御推察申上げ候。

小生も十二年前に惟獨りの娘を失い、其の痛さは今日尚新しき傷として残り居り候。然し乍ら此の傷によりて天国の門は開かれ、神の愛は一層深く示され、同胞の爲めに尽さんとするの心は一層強く励まされ候次第に有之、斯くて小生の得し所は、其の失ひし所にまさり、今日に至つては涙と共に感謝罷在候。之に類する天の恩恵の貴家へも臨み、御一同の今日の悲痛が、他日の感謝と化する時の到らん事を祈り候。

御同情のあまり一言御見舞までに申上候。勿々

大正十三年九月廿日 内村鑑三

徳富蘇峰先生

近衛文麿 昭和十六年八月付書簡

文麿が娘を亡くした時、蘇峰の慰めが助けになったという。

拜啓 貴翰拝誦仕候 御承知の如く小生幼にして父母と別れしも 子を亡へる親の悲痛は今回始めて体験致候次第にして 同じ御体験ある先生より御同情御激励の御言葉いただき 深く感銘仕候 娘の死は前途多難を予想せらる、小生今回の門出の第一歩に於て蒙りたる一大衝撃に相違なきも これ天の下せる試練なりと存じ 一層御奉公の誠を竭すべく覚悟罷在候 先は不取敢右御札申上度如此御座候

八月十二日 文麿

蘇峰先生侍史

大正期の総理大臣

第一代伊藤博文内閣(明十八・十二・二二成立)から数え、第二次世界大戦後の鈴木貫太郎内閣(昭二十・四・七成立)まで約六十年間に二十九人の総理大臣が誕生している。二十九人の中で、蘇峰への書簡がないのは、黒田清輝、山本権兵衛、加藤友三郎の三人である。

大正時代の総理大臣は十一回内閣が変わったので、十五年の間に十一人の総理大臣がいたことになる。平均一・三年に一回変わったことになる。山本権平衛が二回内閣を組閣しているので、十人の総理大臣がいたということである。記載すると、桂太郎、山本権兵衛、大隈重信、寺内正毅、原敬、高橋是清、加藤友三郎、清浦奎吾、加藤高明、若槻礼次郎、以上十名である。大正の総理大臣(十五代から二十五代まで)を見てみよう。(コンサイス人名辞典日本編参照)

第三次桂内閣(大正一・十二・二二一成立)

桂太郎(一八四七—一九二二) 弘化四—大正二 明治時代の政治家・陸軍大将。長州藩士桂信繁の長男。明治三年兵制研究のためドイツに留学。山県有朋・大山巖を補佐し、陸軍の官制を改革整備した。明治二十九年台湾総督。三十四年内閣を組織。日露戦後は西園寺公望と交互に政権を担当した。桂の巧妙な心収攪策はその肥満福相とあいまって、「ニコボン政治」とあだ名された。明治四十一年第二次内閣を組織し、労働運動を弾圧する政策をすすめる。四十三年大逆事件が起きた。同年韓国併合、蘇峰は京城日報の監督に就任。桂は大正一年三度首班となったが憲政擁護運動の高まりの前にわずかに二カ月で辞職せざるをえなかった(大正政変)。大正二年立憲同志会を結成した(立憲同志会設立宣言は蘇峰が執筆した)が、同年十月病没した。徳富猪一郎『公爵桂太郎伝』全二巻が大正六年に出来上がった。

山本内閣 山本権兵衛(大正二・二・二十成立) 書簡なし

山本権兵衛(一八五二—一九三三) 嘉永五—昭和八 明治・大正期の海軍大将・政治家。

第二次大隈内閣(大正三・四・十六成立)

大隈重信(一八三八—一九二二) 天保九—大正十一 明治・大正期の政治家。佐賀藩士大隈信保の長男。幕末動乱に活躍。征韓論に反対した。明治十五年立憲改進黨を創立し総理となり、自由民権運動の一翼になった。明治十五年東京専門学校(早稲田の前身)を創立。明治二十一年伊藤内閣の外相として条約改正の交渉をしたが失敗。二十二年玄洋社員に爆弾を投げられ片脚を失う。三十一年板垣退助と共に憲政党を結成、初の政党内閣を結成。四十三年早大総長に就任。大正三年内閣を組織。第一次大戦にはドイツに宣戦布告を強行。翌年中華民国に二十一カ条要求をつきつけ、内外の批判をうけた。

寺内正毅内閣(大正五・十・九成立)

寺内正毅(一八五二—一九一九) 嘉永五—大正八 明治・大正期の陸軍元帥・政治家。長州藩士宇田多正輔の三男。寺内家の養子。四十三年朝鮮合併が行われると初代朝鮮総督として武断政治を行った。大正五年十月大隈内閣の後を受け組閣。シベリア出兵を強行し、軍備拡張、言論弾圧を行い、その超然とした態度は軍閥政治と世論批判を受け、大正七年米騒動によって内閣は崩壊した。

原内閣(大正七・九・二十九成立)

原敬(一八五六—一九二二) 安政三—大正十 明治・大正の政治家南部藩原直記の孫。岩手県盛岡。明治三年藩校修文所に入り翌年東京の英学校共済義塾に学んだが学費が続かず退学。東京天主教会神学校に入る。外務省に入り井上馨・陸奥宗光に認められ。農商務省に移る。西園寺引退後政友会総裁となる。米騒動で寺内内閣が倒れると、政党政治家総裁となり、会を指導し、ジャーナリズムの支持をうしなわなかった。しかし社会運動を弾圧、普選拒否、シベリア出兵などの強行政策を遂行し、世論の批判の高まるなか、東京駅頭で暗殺された。

高橋内閣(大正十・十一・十三成立)

高橋是清(一八五四—一九三六) 安政一—昭和十二 明治・大正・昭和

期の政治家・財政家。仙台藩士高橋是忠の養子となる。江戸。藩留学生として渡米。翌年帰国して森有礼の書生となり、明治二十五年日本銀行に入り頭角を表し、三十二年副総裁。昭和二年田中義一内閣の蔵相として金融恐慌の収拾にあたり、満州事変後は犬養毅・斎藤実・岡田啓介三内閣の蔵相として軍需インフレ政策を推進し、日本資本主義を救い財界の守護神的存在となったが、二・二六事件で射殺された。

加藤(友)内閣(大十一・六・十二成立) 書簡なし

加藤友三郎(二八六一―一九四六 文久―大正十二) 明治・大正期の海軍元帥・政治家。

第二次山本内閣(大十二・九・二成立) 書簡なし

山本権兵衛(二八五二―一九九三 嘉永五―昭和八) 明治・大正期の海軍大将・政治家。

清浦内閣(大十三・一・七成立)

清浦奎吾(一八五〇―一九四二 嘉永三―昭和十七) 明治・大正期の官僚・政治家。本派本願寺の明照寺住職大久保了思の子。還俗して清浦氏の養子。熊本。明治九年司法省に入り、治罪法制定に従事。明治十九年から山県有朋内相のもとで警保局長として保安条例などの治安立法、警察制度の整備に当たる。第二次松方、山県各内閣の法相に就任、第一次桂内閣の法相、内相兼農商務省を勤めた後、三十九年から枢密顧問官となる。昭和十六年東条英機を後継首班に推す重臣会議に主席した。

加藤(高)内閣(大十三・六・十一成立)

加藤高明(一八六〇―一九二六 万延一―大正十五) 明治・大正期の外交官・政治家。尾張藩服部重文の子。東大。明治五年加藤家を継ぐ。三菱会社に入社。岩崎弥太郎の知遇を得、イギリスに遊学。明治十八年帰国後三菱本社副支配人として郵船会社に入り、弥太郎の長女春治と結婚。明治二十年陸奥宗光の請を入れ、大隈重信外相の秘書官兼政務課長となり、条約改正の立案に参加。明治二十七年駐英特命全權大使として赴任、日英提

携、対露強攻策を主張。三十三年第四次伊藤内閣の外相となり、日英同盟を推進した。明治四十一年日英条約改正・日英同盟改訂に尽力大正三年第二次大隈内閣の外相となり、第一次世界大戦に際し二十一カ条要求を提出した。その後憲政会を組織し、総裁となり、憲政の常道・元老政治の打破・選挙権拡張を唱え、元老と対立、以後苦節十年在野時代が続く。大正十四年内閣を組織し、普通選挙法、治安維持法を制定、閣内紛争により翌年総辞職したが、病にかかり、首相在任中に死去した。

普通選挙論集編纂の際に蘇峰から受けた援助に感謝する永井柳太郎書簡を紹介しよう。

永井柳太郎 大正十一年五月四日付

拜啓

益々御清安奉大賀候。さて先般小生普通選挙論集編纂を思ひ起ち 貴下の御援助を願上候処 御快諾を賜里御多用中にも拘らず筆記者へ御高見御聞かせ下され誠に難有奉深謝候。印刷の都合に依里右製本大層延引致し漸く此程発売の運びに至里候に就き発売者より一部御手元へ届け出させ置き候間既に御覧下され候ひし事と存じ候自費出版の事として別段の御礼も致し難く 何卒不悪御諒如何下され度奉願上候 先は出版に際し御礼旁々御詫迄如斯に御座候 敬具

五月四日

第一次若槻内閣(大十五・一・三十成立)

若槻礼次郎(二八六六一―一九二六 慶応二―昭和二十四) 大正・昭和期の官僚・政治家。松江藩士叔父の若槻敬の養子、東大。明治二十五年大蔵省に入り、主税局長から第一次西園寺内閣の大蔵次官、第三次桂内閣の蔵相。大正政変後立憲同志会に入って政界に進む。加藤高明内閣の成立と共に内相に就任。治安維持法、普通選挙を制定したが大正十五年党人派の反発を生んだ。ロンドン軍縮会議首席全権として、条約調印。重臣会議で東条内閣、日米開戦に不安を表明することはあっても迫力にかけた。

大正期の東京市市長

大正時代の東京市市長は四代目の阪谷芳郎から十代目の伊澤多喜男までである。(◎印は蘇峰に宛てられた書簡のある人)

◎一代 松田 秀雄 明治三十一年十月就任

◎二代 尾崎 行雄 明治三十六年六月就任

◎三代 尾崎 行雄 明治四十一年九月就任明治・大正・昭和期の政党政治家。一八八二年立憲改進黨創立に参画。大正

二年大正政変では国民党の犬養と並んで護憲運動の先頭に立つ。桂内閣に対する鋭い追及は、彼に憲政の神様の名をもたらしに至った。

◎四代 阪谷 芳郎 明治四十五年七月就任

明治・大正・昭和期の財政家・政治家 貴族院議員多数の学校・学会・団体・会社などに関係し「百会長」と称された

◎五代 奥田 義人 大正四年六月就任

明治・大正期の法学者 民法に精通し、英吉利法律学校を創立、その後身の中央大学長をつとめた。

六代 田尻 稻次郎 大正七年四月就任

明治・大正期の官僚・財政学者

◎七代 後藤 新平 大正九年十二月就任

明治・大正期の政治家・医者。東京市長在任中ソビエト代表ヨッフエを非公式に招き、日ソ国交回復に尽力 大正十二年四月に東京市長を退任した後も関東大震災直後の東京市復興計画を帝都復興院総裁として立案した。

◎八代 永田 秀次郎 大正十二年五月就任

大正・昭和期の内務官僚・政治家

昭和五年に東京市長に再任

九代 中村 是公 大正十三年十月就任

◎十代 伊澤 多喜男 明治・大正期の官僚 大正十五年七月就任

大正・昭和期の官僚 和歌山・愛媛・新潟などの各県知事、警視總監をへて、大正十三年台湾総監となり後に東京市長に就任

大正期の雑誌

① 「中央公論」

中央公論社 明治三十二年創刊 麻田駒之助

明治二十年 大谷光尊が開設した西本願寺の普通教の機関誌「反省雑誌」として創刊。明治三十一年に「中央公論」と改名されると同時に仏教評論紙を越えて、総合雑誌としての性格を明らかにする。雑誌運営は麻田駒之助が担当し、「雑誌は公器である」という信念から編集は当局者に任せられた。

瀧田栲陰は、「中央公論」の名編集長と呼ばれ、学会、文壇の埋もれた人材に発表の機会を提供し、「中央公論」の基礎を確立。

徳富蘇峰・夏目漱石・芥川龍之介は瀧田が必ず担当し、その口述筆記の正確さで信頼も厚かった。

② 「新潮」

新潮社 明治三十七年創刊 佐藤義亮

文芸思想の主流を形成。特に大正期においては文芸雑誌の首位を占めるようになった。海外文芸思潮の紹介にも力を入れた。大正八年に出版された島田清次郎の『地上』は、記録破りの売れ行きを示した。傲慢な態度の清次郎は文壇での評判も悪く、次第に精神を病み保養所で三十一才で狂死する。

③「講談俱樂部」

講談社 明治四十二年創刊 野間清二
 明治四十二年に東大緑会弁論部を創設。翌年大日本雄弁会を設立し、雑誌「雄弁」を創刊。ついで講談社を設立し「講談俱樂部」を発刊し、大正雑誌流行のきっかけをつくった。

④「改造」

改造社 大正八年創刊 山本実彦
 「中央公論」と並び自由主義・社会主義の世論を率いた。賀川豊彦の小説『死線を越えて』は創刊二年目の大正九年に連載が始まり、十月には改造社最初の単行本として刊行、いちやくベストセラーとなり「改造」および改造社の名は天下に広まった。十年には志賀直哉の『暗夜行路』の連載も始まり「中央公論」の好敵手としての地位を確立した。

⑤「文芸春秋」

文芸春秋社 大正十二年創刊 菊池寛
 出版当初は、隨筆雑誌、雑文雑誌の趣であったが、しだいに文芸雑誌の体裁をとり、芥川龍之介、川端康成、横光利一、久米正雄など同人も多い。菊池寛からの蘇峰宛書簡(大正十四年三月八日付)は、蘇峰が「文芸春秋」を精読してくれたことを感謝したもので蘇峰が菊池に書簡を書いて二人の交流が始まったことがわかる。

『蘇峰文選』 礼状

『蘇峰文選』 四六判 厚さ8・5cm 特製 装丁皮仕立 定価5円

並製 装丁布仕立 定価3円50銭

『蘇峰文選』とは、大正四年十二月の国民新聞発刊二十五周年記念に際し刊行された、蘇峰自身による著作選集のことである。

明治十九年の『将来之日本』から大正四年五月の『創刊二十五年祝会』ま

での二七二編、全一四三四ページにおよぶ著書大冊。それを贈られた人々二十名からの礼状を巻物にしたのが、「蘇峰文選礼状」である。

『蘇峰文選』の主な作品

- 将来之日本 明治十九年十月
 嗚呼国民之友生れたり 明治二十年二月
 新日本之青年 明治二十年三月
 明治の二先生 福沢論吉君と新島襄君 明治二十一年三月
 吉田松陰録一章 松下村塾 明治二十六年十二月
 瘦我慢の説を読む 明治三十四年八月『人物偶評』載録
 文学と人生 明治三十九年九月『日曜講壇』載録
 セシル・ローズ 明治三十五年三月
 七十八日遊記 明治三十九年五月〜八月
 御大葬儀の辞 大正元年九月十三日
 山水隨縁記 大正二年七月〜八月

『蘇峰文選』 礼状差出人(全二十名)

- 松方正義 (一八三五〜一九二四) 明治時代の政治家
 野田卯太郎 (一八五三〜一九二七) 明治・大正期の政治家・実業家
 後藤新平 (一八五七〜一九二九) 明治・大正期の政治家
 立花小一郎 (一八六一〜一九二九) 軍人・政治家
 明石元二郎 (一八六四〜一九一九) 明治・大正期の陸軍軍人
 八代六郎 (一八六〇〜一九三〇) 軍人・政治家
 田中義一 (一八六八〜一九二九) 明治・大正期の政治家
 秋山真之 (一八六八〜一九一八) 軍人
 柴田家門 (一八六一〜一九一九) 政治家
 近藤廉平 (一八五七〜一九二九) 実業家
 人見太郎 (一八六五〜一九二四) 評論家
 古谷久綱 (一八七四〜一九一九) 政治家
 柏井園 (一八七〇〜一九二〇) 神学者・牧師
 平田久 (一八七一〜一九三三) 国民新聞記者 同志社卒 民友社社員

福田和五郎 (一八七〇—一九二七) 國民新聞記者 國民之友編集員

石井たつ (石井十次夫人)

金子堅太郎 (一八五三—一九四二) 政治家

浮田和民 (一八五九—一九四五) 政治学者

迫源次郎・小田幹治郎

以上の二十名は、蘇峰が明治時代に交遊の基礎を築き、大正にそれを拡げていった人々で、巻き物にして残したのは、その交遊に大きな意味を蘇峰が感じていたからであろう。

大正期の蘇峰著作 (五十六冊)

- ① 先帝御聖徳一斑 (大正元年八月)
- ② 第十二日曜講壇 (國民叢書第三六冊最終局) (大正二年八月)
- ③ 政治家としての桂公 (大正二年十一月)
- ④ 時務一家言 (大正二年十二月)
- ⑤ 山水隨縁記 (大正三年一月)
- ⑥ 政黨と首領 (無名氏と署名 実業之日本社版) (大正四年二月)
- ⑦ 世界の交局 (大正四年三月)
- ⑧ 兩京去留誌 (大正四年九月)
- ⑨ 蘇峰文選 (大正四年十二月)
- ⑩ 大正政局史論 (大正五年三月)
- ⑪ 大正の青年と帝國の前途 (大正五年十一月)
- ⑫ 公爵桂太郎傳 (二冊) (大正六年二月)
- ⑬ 蘇峰詩草 (大正六年五月)
- ⑭ 杜甫と彌耳敦 (大正六年九月)
- ⑮ 支那漫遊記 (大正七年六月)
- ⑯ 大戰後の世界と日本 (大正九年九月)
- ⑰ 蘇峰詩草 (本活本) (大正十一年二月)
- ⑱ 國民教育論 (大正十二年一月)
- ⑲ 國民自覺論 (大正十二年三月)

- ⑳ 政界の革新 (大正十三年二月)
- ㉑ 蘇峰文粹 精神の復興 (大正十三年三月)
- ㉒ 烟霞勝遊記 (二冊) (大正十三年七月)
- ㉓ 大和民族の醒覺 (大正十三年七月)
- ㉔ 國民小訓 (大正十四年二月)
- ㉕ 蘇峰隨筆 (大正十四年九月)
- ㉖ 三十七八年役と外交 (大正十四年十一月)
- ㉗ 第二蘇峰隨筆 (大正十四年十二月)
- ㉘ 第一人物隨錄 (大正十五年五月)
- ㉙ 野史亭獨語 (大正十五年七月)
- ㉚ 婦人の新教養 (主婦之友社版) (大正十五年八月)
- ㉛ 頼山陽 (大正十五年十一月)
- ㉜ 西郷南中洲先生 (大正十五年十一月)
- ⑤と⑩以外は民友社刊 三十四冊
- 近世日本國民史 (大正七年十二月)
- ① 織田氏時代前篇 (大正八年六月)
- ② 織田氏時代中篇 (大正八年十月)
- ③ 織田氏時代後篇 (大正九年三月)
- ④ 豊臣氏時代甲篇 (大正九年十二月)
- ⑤ 豊臣氏時代乙篇 (大正十年六月)
- ⑥ 豊臣氏時代丙篇 (大正十年十月)
- ⑦ 豊臣氏時代丁篇 朝鮮役上卷 (大正十一年一月)
- ⑧ 豊臣氏時代戊篇 朝鮮役中卷 (大正十一年五月)
- ⑨ 豊臣氏時代己篇 朝鮮役下卷 (大正十一年九月)
- ⑩ 豊臣氏時代庚篇 桃山時代概観 (大正十二年一月)
- ⑪ 家康時代 上卷 関原役 (大正十二年五月)
- ⑫ 家康時代 中卷 大阪役 (大正十二年十二月)
- ⑬ 家康時代 下卷 家康時代概観 (大正十三年十月)
- ⑭ 徳川幕府上期 上卷 鎖国論篇 (大正十三年十月)
- ⑮ 徳川幕府上期 中卷 統制篇 (大正十三年十一月)

⑯徳川幕府上期 下巻 思想篇

(大正十四年四月)

⑰元禄時代 上巻 政治篇

(大正十四年六月)

⑱元禄時代 中巻 義士篇

(大正十四年九月)

⑲元禄時代 下巻 世相篇

(大正十四年十一月)

⑳元禄享保中間時代

(大正十五年二月)

㉑吉宗時代

(大正十五年六月)

㉒寶曆明和篇

(大正十五年九月)

二十二冊

大正期の文化人たち

与謝野晶子 (一八七八―一八四二 明治十一―昭和十七) 歌人・詩人・大阪生まれ。処女歌集「みだれ髪」は、明星派の指標となると共に、浪漫主義として記念碑的作品となった。大正十二年六月十二日に帝国ホテルで催された蘇峰の学士院恩賜賞祝賀会の様子を同年七月一日発行の「明星」の「一隅の草」に「唯だお一人の徳富先生」と題して書いている。その文章は「新時代の國民」に再掲載された。よい文なので紹介しよう。

(前略) 清浦、後藤、箕浦、三上四氏の祝辞を聴きながら、徳富先生の功業を賛美するのに甚だ其人を得ていないのを遺憾に思ひました。その述べられた所を聴くと、大切な徳富先生の詩人的天資も、経世家的才気も、殊に後進に対する誘掖の愛に深く濃かなこと、その精力の偉大、若やかな情思の豊満、繊細な神経の緊張等に就て、老いて愈壯んな先生を精確に解析し、礼讃する人の無かつたのは、記念的な公会の席であるだけ不備なことで無かつたでせうか。私は日本の政界の巨頭が学芸と学者とに就て余りに何も知らないのに驚きました。(中略) 徳富先生の如きは明治に至らなければ世に現れないだけの、大きな、新しい、複雑した人格です。(中略) 其の晩は千人を越えた来会者があって盛会でしたけれども、私は心の中で非常に淋しかったです。徳富先生の如き大きな

人格では社会の批評などは大して気にせられないでせうが(中略) 先生はほんとうの知己のほんとうの批評を聴きたいと思はれるでせう。然るに先生ほどの秀れた業跡持たれた一生に対して、なんと云う報いられない今夜の祝辞であろう。私はかう思つて眺めると、式場の椅子に前こごみに掛けていられる、老体の徳富先生のお姿までが一種の寂寞、一種の悲哀を以つて感ぜられました。(中略) ほんとうの知己としてほんとうの学者的祝辞を徳富先生に述べ得る最も適任な賓客は森(鷗外) 先生一人では無かるうか、と私は思つて見るのでした。(後略)

与謝野鉄幹 (一八七三―一九三五 明治六―昭和十) 詩人・歌人 京都生まれ。雑誌「明星」創刊 歌論「亡国の音」で旧派の短歌を痛烈に批判した 西村伊作らと文化学院を創設。

展示書簡 大正十二年七月五日付(巻紙約2m40cm)

蘇峰の学士院恩賜賞祝賀会において、早めに退席した与謝野夫妻を氣遣つて書簡を出した蘇峰に対する礼状で、退席の理由を未知の「某氏」の不法な発言によるとしている。(要約)

島崎藤村 (一八七二―一九四三 明治五―昭和十八) 詩人・小説家 本名春樹。明治二十六年北村透谷らと「文学界」を創刊。翌二十七年の透谷の自殺は「文学界」の浪漫主義に転機をもたらしした。「若菜集」は浪漫主義最初の芸術的開花として、文学史上記念すべき詩集となった。その後散文に転じ、明治三十九年「破戒」を自費出版し、自然主義の代表的作家として知られた。昭和四年から自伝的藤村文学の集大成である「夜明け前」を「中央公論」に連載した。

展示書簡 昭和十三年十二月二十七日付

多事なりし本年も最早余日も御座なく候処、先生にはいよ々々御健勝の趣、かげながら御慶び申上候、さて甚だ突然の儀には候得共、今回新潮社にて少年日本文庫刊行の計画有之その第一巻として国史物語の題目を選び、是非とも先生之御執筆を煩はしたしとのことに有之候。右の如き文庫に先生之史筆を煩はすことは恐縮之至ながら、吾国少年之前途を思へば明治天皇の御一生を中心に好き国史物語を興へたくと

存じ、小生よりもこの御依頼申上ぐる次第に御座候。猶委度事は新潮社支配人中根鮎十郎氏より御聴り被下度、何卒孫にでも話しかけらるる御氣持にてやさしき言葉を書いて頂けるやうならば右文庫にとりても光榮之至りに有之候、略儀ながら御紹介やら、御依頼やらをかねて突然之失礼をまはへりみずこのこの書面差上げ申候。 敬具

昭和十三年師走廿七日 島崎生

徳富先生 御座右

注 表 徳富蘇峰様 中根鮎十郎氏持参

裏 十二月二十七日 東京麹町六番町十三 島崎春樹

吉屋信子 (一八九一—一九七三 明治二十九年—昭和四十八年) 小説

家 新潟県生れ

展示書簡：大正十四年四月十五日付 (巻紙 1 m 35 cm)

蘇峰を「お爺さん」とよび、自分の刺激昂奮刺にするため「文章報国」と横書きに書いてほしいという揮毫願いの書簡である。この書簡の九ヶ月前に大森駅のホームで吉屋信子に蘇峰は声をかけて、その日のうちに意気投合。(要約)

三上於菟吉 (一八九一—一九四四 明治二十四—昭和十九) 小説家 埼玉県生れ 講談雑誌主幹生田蝶介に知られ、宇野浩二の忠告を排して、同誌に水上藻花の筆名で翻案時代小説を書き、また最初の長編小説『悪魔の恋』(大五)を連載し、大好評を博した。大正五年、長谷川時雨と所帯をもつ。昭和三年長谷川時雨を助けて「女人芸術」を創刊し、また八年サイレン社を創立し、多数の単行本を刊行した。

展示書簡 昭和十二年六月十八日付

わたしの持病について御丁寧な御見舞い状をたまわり有難う存じます。発病当時、先生の御著書を読み耽つておりましたのは、あのまま死んでしまったならば、猶更幸福なやうな気がいたします。しかし生きてしまった以上はこれからも一層勉強してゆくつもりで御座います。なにせ困憊いたしておりますからにはかに一書を裁して御礼を申し上げます。猶長谷川もこの文章を書いてをりまして、先生の御厚志

を非常に悦びをります。(要約)

長谷川時雨 (一八七九—一九四一 明治十二—昭和十六) 劇作家・小説家。東京生れ。幼い頃の時雨は無口で、病弱、ひっこみじあんだったため、アンポンタンと呼ばれていた。祖母やすの秘蔵っ子として、文学好きな少女に育った時雨だが、その祖母の死により、本も自由に読むことが出来ない境遇におかれ、縁談も時雨の気持ちとは無関係に進められ、十九歳で結婚した。だがこの結婚は長くは続かず、健康がすぐれぬことを理由に籍を戻し、やつのことで、念願だった文学の道へ進んでいく。

展示書簡 昭和二年五月四日付

時雨が贈った「近代美人伝」に対しての蘇峰の高評を感謝する内容。

島田清次郎 (一八九九—一九三〇 明治三十二—昭和五) 小説家 石川県生れ 大正七年七月長編小説『地上』第一部をかきあげた。この小説は第一次大戦末期の思想界の動揺を反映して、青年の心情に共感を呼ぶものがあり、評論家長谷川如是閑、境利彦らの絶賛を受け記録破りの売行きを示した。天才作家と呼ばれ、一躍文壇の流行児となったが、その思い上がった尊大な態度から、先輩作家の嫉妬と反感を買うこともすくなくなかった。次第に精神を病み、三十一歳の若さで巢鴨の保養院で狂死。

展示書簡 大正十二年三月十九日付(元氣な時) 大正十四年四月二十二日付 大正十四年九月二十七日付(入院時) 大正十四年九月二十七日付

(前略)毎日となく院長先生の池田隆徳なる人に退院を要求しているのですが、今にむさくるしい六畳の病室の一室へ、白痴か不良青年様のもの二名と同室監禁同様にして、退院をゆるさなさいでいます。昨年七月三十一日付でこの保養院といふ薄ぎたない平や建ての牢屋のやうなところへぶちこまれてから、一年二ヶ月の間、全く外界との交渉を絶えさせられているわけです。(中略)毎食パン一斤と牛乳一合で着物は自分が帰京する時たづさえてきたスキトケースの中の絹類物は一切行えしれず、身丈のあわぬ安木綿、仮り縫いのきものをきせられて、読書も執筆もできずにいます。(中略)保養院に入れられた時

一種の催眠状態に陥いられ、その状態のまま、で警視庁医務課の金子なる人に診察されて、無理に入院させられたので、今日迄どうにか忍耐しているのは、自己の身体が花柳病をわずらっていたのを自覚したこと、恐るべき暴力によって監禁されているからで、全然自身の意志に反しているのです。(中略)「神経衰弱」には近視鏡をかけねばならぬのに眼鏡を取り上げられた。

木村莊太 (一八八九—一九五〇 明治二十—昭和二十五) 小説家・評論家。東京生れ。大正中期より白樺派に接近。武者小路実篤、長与善郎、千家元磨らについて評論を書いた。大正七年新しき村に参加したが、すぐに離村した。戦後、『魔の宴』(昭二五・五 朝日新聞社)を上梓し、その直前に自殺した。この書は青春告白の自伝として興味があるが、明治大正の文壇側面史としても価値も持つといわれる。

展示書簡 昭和十四年七月二十五日付

石川三四郎 (一八七六—一九五六 明治九—昭和三十) 社会運動家・社会主義評論家・思想家。三十五年万朝報社に入社。三十六年十一月、平民社に入社。週刊「平民新聞」「直言」などによって同志と共に非戦運動、社会主義運動をつづけた。

展示書簡 大正九年三月十三日付

三宅やす子 (一八九〇—一九三二 明治二十三—昭和七) 小説家・評論家。京都生れ。理学士三宅恒方と結婚。結婚後も夏目漱石、小宮豊隆に師事し、創作に志した。夫の死後、文筆で立つことを決意、評論、小説、講演、社会活動等、多方面に啓蒙的な中間的ジャーナリストとして活躍した。作風は私小説風で、通俗的であり、漱石の「大味」という評を抜けれなかったという。

展示書簡 大正十五年二月二十一日付

平塚らいてう (一八八六—一九七一 明治十九—昭和四十六) 評論家。本名奥村明。筆名は雷鳥をかなにしたもの。四十四年九月「青鞥」を創刊。

『元始、女性は太陽であった』という発刊の辞を載せる。以後「青」の中心的存在として、雑誌の編集、経営に努力する一方、『円窓より』と題する評論や劇評、翻訳などを発表。自由を求める若い女性たちに「希望の灯」を点じて、文芸運動のみならず以後の婦人運動に大きな影響を与えた。

展示書簡 大正十五年十月六日付

深尾須磨子 (一八八八—一九七四 明治二十一—昭和十九) 詩人。本名は志げの。幼いころは生活が苦しく、養女に出されたり、親戚に預けられたりしたが、結婚後は鉄道技師で詩人でもあった夫の影響で語学、音楽などの才能が開眼した。夫の死後、その遺稿集を出すことを機に「明星」から女流詩人として出発した。与謝野晶子に師事。

展示書簡 大正十一年十一月八日付

蘇峰の温かい手紙に感謝し、お父様と叫びたいと記している。他の書簡も、詩集の書評を願ったり、面会でできた喜びを記していたり、須磨子が蘇峰を尊敬し頼りにしている様子が伺える。蘇峰も須磨子を温かく父のような眼差しで見守っていたに違いない。女性の才能や感覚を認める蘇峰ならではのつながりである。

松岡家の兄弟

松岡家は田原村辻川(兵庫県)の学問の香り高い家であった。松岡家の八人の兄弟のうち、三人は早世して五人兄弟となる。この松岡兄弟は揃って俊秀であった。しかも兄弟それぞれが別個の個性の学究なのである。長兄^{あひだ}万延元年(昭和九年)は医学に携り、地域の衛生改革を推進し、郡会議員、町長などをつとめ、地方行政にも尽力した。常に長男として、松岡一家の支えとなった。この長男、松岡鼎の書簡は当館にないので、他の四人の松岡兄弟からの蘇峰宛書簡・書画を展示した。

眼科医でもあり、歌人・国文学者として名高い、三男井上通泰、民族学者の六男柳田国男、海軍軍人退役後、南洋諸島の言語、民族を研究した言語学者の七男松岡静雄、日本画家として数々の名作を残した八男松岡映丘。兄弟それぞれの才能の多様さに驚くが、これは生家の学問的環境に負うところだろう。父操は医を業とし、国学、儒学にも通じていた。祖母小鶴は

漢文集をつづり、その夫である祖父至も真継立斎と名乗った儒学者であった。(平成四年、姫路文学館編集・発行の「松岡五兄弟」参考)

井上通泰(一八六六一一九四一 慶応二―昭和一六)(生)兵庫県 歌人・国文学者。松岡操の三男。井上碩平の養子となる。帝国大学医科大学卒。眼科医を続けながら、作歌に励み、森鷗外らと歌会「常磐会」を結成。森鷗外の訳詩集『於母影』のメンバー。御歌所寄人、宮中顧問官の要職をつとめる。晩年は医業を廃し、万葉集・風土記の研究に没頭。好きな南天の木にちなみ、自宅を「南天荘」と号し「南天先生」と親しまれた。著書『南天荘詠草』『万葉集新考』『播磨国風土記』など。

柳田国男(一八七五―一九六二 明治八―昭和三七)(生)兵庫県 民族学者。松岡操の六男。柳田直平の養子となる。東京帝国法科大学政治科卒。官界に入り、その間各地を廻り、土地に住む人々の生活を記録した。大正二年、雑誌『郷土研究』創刊。各種の民族学研究会を発足させ、民族学を世に広める。昭和二十六年、文化勲章受賞。著書『遠野物語』『明治大正史世相編』『海上の道』など。

松岡静雄(一八七八―一九三六 明治十一―昭和十一)(生)兵庫県 言語学者。松岡操の七男。海軍兵学校を首席で卒業。海軍のエリートコースを進む。海軍大佐まで昇進するが病により退役。退官後、兄柳田国男の助力を得て「日蘭通交調査会」設立。海軍士官当時より南洋諸島の言語・民族を研究。晩年は鶴沼の地で学問に没頭。著書『太平洋民族誌』『日本言語学』『播磨風土記』『日本古語大辞典』など。

松岡映丘(一八八一―一九三八 明治十四―昭和十三)(生)兵庫県 日本画家。松岡操の八男。東京美術学校日本画科を首席で卒業。東京美術学校教授。大和絵の伝統を現代に蘇らせることに尽力。大正元年「宇治の宮の姫君たち」が文展初入選。大正五年「室君」が文展特選。生涯を日本画にかけた映丘門下からは現代の画壇を支える優れた作家が輩出。長与家の人々

長与家は代々肥前大村藩の藩医であった。専齋は、大阪の諸方沢庵の塾で西洋医学を学び、のちに明治政府に仕えた人。一五歳で専齋に嫁した園子は、大村藩の家老後藤多仲の長女である。八人の子供のうち一人が事故死のほかは、それぞれが上流社会の一員となった。蘇峰の書簡があるのは専齋の他、三男の又郎、四男の裕吉、五男の善郎である。長与又郎は、父親と同じく医学者となり、夏目漱石の解剖執刀者でもあった。四男裕吉は、岩永家へ養子入籍し、実業家として活躍した。五男善郎は、八番目の末子で病弱でもありあまやかされて育つ。十四歳のとき父を失うが、晩年の父からは「論語」の素読をうけるなど、人柄に深く感化された。松岡家の兄弟と同じくそれぞれに才能を開かせた人々であった。

長与専齋(一八三八―一九〇二 天保九―明治三五)(生)肥前(長崎県)幕末・明治期の医学者。大村藩医長長与中庵の子。長与又郎・善郎の父。大阪に出て緒方洪庵の適塾に入門。長崎の精得館に入り、ボンペから医学を学ぶ。大村藩侍医となる。明治元年、長崎医学学校校長。内務省衛生局長。コレラ予防など衛生行政に尽力。著書に回想録『松香私志』

長与又郎(一八七八―一九四一 明治十一―昭和十八)(生)東京 明治・大正・昭和期の医学者。長与専齋の三男。善郎の兄。号を雷山。東大卒業後、ドイツのフライブルク大学留学。帰国後東大教授。医学部長。東大総長。帝大総長官選案に反対、大学の自治を守る。

長与善郎(一八八八―一九六一 明治二十一―昭和三十六)(生)東京 大正・昭和期の小説家・劇作家。長与専齋の五男。又郎の弟。東大中退。雑誌「白樺」に加わり、評論・小説・戯曲を発表。同誌発表の戯曲「項羽と劉邦」が出世作。小説「青銅の基督」「竹沢先生と云ふ人」が代表作。「白樺」廃刊後「不二」主宰。戦後、自伝『わが心の遍歴』で読売文学賞。芸術院会員。

岩永裕吉(一八八三―一九三九 明治十六―昭和十四)(生)東京 昭和期の実業家。長与専齋の四男。善郎の兄。岩永家に養子入籍。京大卒。満鉄

退社後、寺内内閣の鉄道院総裁、後藤新平の秘書官。退官し、勅選貴族院議員。

森鷗外と石黒忠意の書簡

長与専齋親子の書簡コーナーの傍に、森鷗外と石黒忠意の書簡を展示した。明治二十三年、四十五歳の石黒は陸軍軍医総監に任ぜられる。この年は、森鷗外が「舞姫」を「国民之友」に発表した年である。石黒は鷗外の陸軍軍医時代の上司である。鷗外が軍医と文学者の二足のわらじを履くことを嫌い、小倉に左遷させたりした上司として語られている人物であるが、平成四年（鷗外生誕百三十年）に、文京区教育委員会より発行された『鷗外をめぐる百枚の葉書』の中では、石黒について「鷗外の全陸軍軍医生活に最も影響力を及ぼした上官」と説明している。

森鷗外（一八六二—一九二二 文久二—大正十二）島根県生まれ 明治・大正期の軍医・小説家・評論家。石見津和野藩の典医の子。本名林太郎。別号鷗外漁史・観潮楼主人など。東大医学部卒。陸軍軍医となり、明治十七年ドイツへ留学、明治二十一年帰国後、陸大・軍医学校の教官となる。明治二十二年訳詩集「於母影」を「国民之友」に発表、雑誌「しがらみ草紙」創刊。明治二十三年小説「舞姫」を再び「国民之友」に発表。「即興詩人」を名訳するなど、外国文学の翻訳・紹介にも功績が多い。軍医として日清戦争に出征。明治三十二年、軍医部長として小倉へ赴任。明治三十七年、日露戦争に軍医部長として出征。明治四十年、陸軍軍医総監。大正元年の乃木希典の殉死は鷗外に転機をもたらし、歴史小説に没頭した。大正五年に退役。翌六年に帝国博物館長兼図書頭に任ぜられ、大正十一年六十一歳で没するまでその職にあった。津和野にある墓は、遺言通り、中村不折の筆で「森林太郎之墓」とのみ刻まれている。

石黒忠意（一八四五—一九四一 弘化二—昭和十六）（生）陸奥（福島県）明治時代の軍医。平野順作の長男、のち石黒家の嗣子、石黒忠篤の養父。号は況齋。軍医制度確立者。若くして医業を志して江戸に出、医学所に入学。明治四年、兵部省に出仕し、一等軍医に任ぜられ、佐賀の乱、西南戦争に

従軍。明治二十三年、陸軍軍医総監となる。

次男萬熊を亡くした蘇峰への慰めの書簡

およそ親が子を亡くす悲しみ程、辛いものはないであろう。三十三歳の次男萬熊を、腸チフスで亡くした時の蘇峰の心を思い、内村鑑三・嘉悦孝が慰めの書簡を寄せている。内村鑑三は子供を亡くすという同じ経験をし、クリスチャンとしての心を書き、蘇峰を慰めている。同郷（熊本県）の嘉悦孝は、蘇峰より四歳年下の女性である。嘉悦の書簡も、優しい慰めの心があふれている。余談であるが、嘉悦学園の卒業生という女性が来館した折り、「嘉悦先生は蘇峰氏が大好きで一生結婚なさらなかったと、在学中何度か伺っていたので、嘉悦先生の蘇峰宛書簡を拝見でき、今日は感激しました」と語っていたが、初めて聞く奥床しい話であった。尚、近衛文麿の書簡は、昭和十六年のものだが、「娘を亡くした時、蘇峰からの書簡が慰めになった」というもので、このコーナーに展示した。

内村鑑三（一八六一—一九三〇 文久一—昭和五）江戸生まれ。明治・大正期のキリスト教の代表的指導者。高崎藩士内村金之丞の子。札幌農学校、アーモスト大、ハートフォード神学校卒。明治二十四年、一高講師の時、信仰上の立場から教育勸語に対する敬礼を拒否して「不敬事件」を起こし免職となる。日清戦争に際して「義戦論」を唱える。明治三十年「万朝報」に招かれ、足尾銅山鉱毒事件に関し「鉱毒地巡礼記」を連載し、その実感を世に訴えた。明治三十六年、日露戦争開戦にあたり、幸徳秋水・堺利彦らと非戦論を主張し退社。特定の教派・神学を持たず、聖書にのみ基づく信仰「無教会主義」を唱え、激的な福音的思想を形成し、一部知識人に深い影響を与えた。その門下には矢内原忠雄らがいる。著作に『余は如何にして基督信徒となりし乎』など。 展示書簡は5頁参照

近衛文麿（一八九一—一九四五 明治二十四—昭和二十四）東京生まれ。昭和期の貴族政治家。近衛篤磨の長男、秀磨の兄。京大卒。出自に恵まれ、元老西園寺公望にその後継を嘱望されながら、西園寺を離れ「革新貴族」の道を進む。河上肇を慕って京大から東大へ転じるなど出自への感傷と、

出自に伴う権力嗜好とが交錯し、心情的に皇道派・観念右翼に近い。しばしば生じる意図と結果の分裂のたびに運命の語を口にして感傷に逃避する彼を、世評は「近衛謝まろ」と訓じ、友人木戸幸一も「すぐ辞めたがる男」と評した。昭和十二年（日中戦争勃発の年）第一次内閣組閣。昭和十五年第二次内閣発足とともに、新体制運動を進め、政党解消・翼賛会の実現や「松岡外交」を軌道に乗せ、枢軸外交・南進策を確立した。その後の日米交渉過程で松岡洋右を更迭、第三次内閣を率い交渉成立につとめたが、東条英樹陸相の主戦論の前に総辞職。敗戦後、東久迩内閣の國務相や内府御用掛として憲法改正に当たったが、GHQの戦犯出頭命令を受けて服毒自殺した。 展示書簡は5頁参照

嘉悦孝かよたか（一八六七—一九四九 慶応三）昭和二十四）熊本生まれ 明治・大正期の女子教育者。嘉悦氏房の長女。成立学舎卒。熊本で教鞭をとって後上京し、女紅学校、成立学校の教師をへて、明治三十六年、私立女子高校「嘉悦女子中学・高校」を創立。女子教育に尽力した。また多くの婦人団体にも関係し、吉岡弥生らとともに婦人界の指導者であった。 展示書簡は5頁参照

上田敏と訳詩集

上田敏訳のフランスの詩の一篇など、若いころ口遊んだ人が多いのではないだろうか。上田敏の蘇峰宛の書簡は、書簡整理の段階ではなかったのだが、資料整理の際、蘇峰が筆で「日本に於ける羅馬字の活字元祖」「上田敏氏調査」と封筒表に書いているものを資料の中からみつめた。四枚の硬い便箋には美しいラテン語と文様が書かれている。明治四十三年、上田敏の自伝的小説「うづまき」が「国民新聞」に連載された。当時の自然主義文学に対して「耽美派」の立場に立つ小説として注目された。今回初展示の上田敏の書簡の封筒には切手がなく、年月を推察できないが、国民新聞連載小説が決まる前後の頃ののだろうか。このコーナーには他に、上田敏の意志を継いでダンテの「神曲」を完訳した竹友藻風や、賀川豊彦・沖野岩三郎、柏井園などのキリスト者、内藤鳴雪・菊池寛・高橋邦太郎の俳人・文学者らの書簡も展示した。

上田敏うへだ びん（一八七四—一九一六 明治七—大正五）東京生まれ 明治時代の翻訳家・詩人。号を柳村。東大卒。北村透谷らの「文学界」や「帝国文学」「明星」誌上に詩・評論・翻訳・外国文学の紹介などを発表。明治三十二年処女作「耶蘇」を出版、ついで「最近海外文学」翻訳美文集「みをつくし」「文芸論集」「詩聖ダンテ」を刊行。明治三十八年には、代表作であり、文学史的にも重要な訳詩集「海潮音」を刊行、その美文が注目された。その後、東大・京大の教壇に立ち、英・米にも留学。

竹友藻風たけともぞうふう（一八九一—一九五四 明治二十四—昭和二十九）大阪生まれ 大正・昭和期の詩人・英文学者。本名虎雄。コロンビア大学卒。大阪大教授などをつとめ、「文学論」「詩の起源」「英文学史」などの著書がある。「ルバイヤット」など訳詩集も多い。典雅な詩風で知られた。大正二年の処女詩集「祈祷」以下の詩は「竹友藻風詩集」（昭和二年）に収録されている。上田敏の意志を継いで、昭和十七年ダンテの「神曲」を完訳した。

高橋邦太郎たかはし くにたろう（一八九八— 明治三十一—）東京生まれ 仏文学者。高橋治作の長男。東京外語仏語部（法律専攻）東大仏文科卒。少年時代から文学を愛して森鷗外、永井荷風、小山内薫、芥川龍之介などに近づく。鴎外の小説「細木香以」（大正六年）に高橋邦太郎の名が出る。大正十三年、築地小劇場の開場とともに文芸部員として加わった。戦時中、日本放送協会職員として、南方へ出張、終戦を迎えた。戦後は、幕末・明治初期の日仏文化交流史研究のため、フランスなどで現地調査をした。主な著作にアレクサンドルデュマの『椿姫』（昭和三三）、『ジョンマゲ大使海を行く』（昭和四十二）『お雇い外国人6 軍事』（昭和四十二）など。

手紙読み下し 高橋邦太郎 大正五年十一月二十日 徳富先生

未知の一青衿より天下の大文豪たる先生にかゝる手紙を差上げる無礼をお赦し下さい。

偕、同便にて佛国闊秀作家にして、同国騷壇に於ける青アユストロペンゲ機メカニクの雄たる

マリイズ・シヨワジイ原著「巴里のどん底」を座右に献呈する光栄を有し
ます。

売笑のこと、もとより人倫に反することは、何人もこれを知るところで
ありますが、その実状を知るものは決して多しと致しません。殊に世界の魔
公園と称せられる巴里の売笑に関しては、人これを知る如くして、しかも
これを研むること浅いのであります。マリイズ・シヨワジイ女史は巴里入
すら知らざるあらゆる売笑相を採訪して、この一書を公にしました。
一ヶ月にして、二百万部を売り尽し、今なほ盛に売れゆきつ、あります。
現に小生は百七十六版によってこれを訳述したものであります。しかも女
子がこの書を公にしたるは、決して単にこの悪徳を世に暴露したるのみに
非ずして、警世の一端に資せんとしたるは巻末の一文これを証して余りあ
るものと信じます。

この一書を訳述刊行に当たり、小生がこの書を何人に贈呈すべきかと考へ
たる所、第一に思ひ浮びたるは先生でありました。先生は新聞界の大
元老であられます。佛蘭西女探訪の名著を座右に献呈するも、必ずや訳者
の微意をお汲み取り下さることを信じます。なほ、小生は目下時事新報夕
刊に「開陽丸異聞」なる大衆小説を連載中の一歴史学徒にございます。

句々 不尽 高橋邦太郎拜

注 封筒表 府下荏原郡入新井町新井宿二、八三一 徳富猪一郎様 スム
返事済み印アリ裏 下谷区上野花園町十四 高橋邦太郎拜

沖野岩三郎(一八七六―一九五六 明治九―昭和三十二) 和歌山県生まれ
大正・昭和期の小説家。明治学院神学部卒。幾多の生活上・思想上の遍歴
の後、社会主義的思想を持つ牧師となる。大正七年親友大石誠之助をモデ
ルにした処女小説「宿命」を、「大阪朝日新聞」に連載して好評を博し、以
後文筆業に転じた。昭和六年外遊、その紀行文「太平洋を越えて」(欧州
物語)のほか、小説・童話・随筆がある。

柏井園(一八七〇―一九二〇 明治三―大正九) 高知県生まれ

明治・大正期の神学者・牧師。同志社。植村正久の推薦で明治学院、東京
神学校の教授となる。日本基督教青年会主事もつとめ「開拓者」「文明評論」

の刊行にも係わる。東京神学校での講義をまとめた「基督教史」(大正三三)
はわが国最初の包括的キリスト教史である。「柏井全集」全十一巻。別巻一。

賀川豊彦(一八八八―一九六〇 明治二十一―昭和三十五) 兵庫県生まれ
大正・昭和期のキリスト教社会運動家。賀川純一の子。プリンストン大卒。
徳島中学時代洗礼を受け、明治四十年神戸神学校に進み、路傍伝導を始め
る。大正三年アメリカに留学。大正六年帰国後、神戸の貧民窟に戻り、馬
島間の協力を得て無料巡回診療を始める。友愛会に参加、大正八年関西労
働同盟会結成、理事長となる。大正十年の争議敗北後は労働運動の指導的
立場から退く。昭和に入りキリスト教布教活動に従事、国際的舞台でも講
演活動を展開。消費組合活動にも献身。戦後(昭和二十一年)勅撰貴族院
議員となり日本社会党結成に参加した。大正九年刊行の自伝的小説「死線
を越えて」は大ベストセラーとなった。

菊池寛(一八八八―一九四八 明治二十一―昭和二十三) 香川県生まれ
大正・昭和期の小説家・劇作家。一高同級の芥川龍之助・久米正雄らと大
正五年第四次「新思潮」を創刊。同誌に戯曲「屋上の狂人」「父帰る」な
どを発表したが、当時は世評に上らず、「時事新報」の記者となる。その
後小説にむかい「恩讐の彼方に」(大正八年)などで一躍流行作家となり、
記者をやめ作家生活に入る。大正十二年雑誌「文芸春秋」を創刊。出版事
業の進展につれて創作から離れていったが、新人発掘などに功績を残した。
昭和二十八年、彼の名を記念して「菊池寛賞」が制定された。

内藤鳴雪(一八四七―一九二六 弘化四―大正十五) 江戸生まれ

明治・大正期の俳人。松山藩士内藤同人の子。本名素行。別号老梅居など。
松山権少参事、学務官をへて明治十三年文部省に転任。明治二十三年文部
省参事官となるが、病の為、翌年辞任。松山藩寄宿舎監督となり、同舎生
正岡子規の感化で明治二十五年四十六歳で句作を始めた。生涯主宰誌は持
たなかったが「ホトトギス」などの俳句選者として指導的役割を果たした。
豊かな学識と古典的格調を持つ俳人。

おわりに

当初、今回の展示は蘇峰宛書簡から見た大正時代と考えていたが、そこまで勉強が追いつかず、大正という十五年間をどんな政治家が動かしていたのか、東京の市長はどんな人々であったのか、十一回組閣が行われているが、総理大臣はどんな人々であったのか。なぜそんなに度々組閣をしたのか。台湾の総督はどんな人がどのように赴任されたのか。大変初歩的な疑問を一つ一つ見ていった。大正時代の蘇峰はいわゆる「大正政変」の後、心身共に疲れていた。父一敬の死、次男萬熊の死、国民新聞社震災被害、と不幸が続いた。京城日報の監督をやめた。『近世日本国民史』を書き始め、最初の織田信長、豊臣秀吉で帝国学士院より恩賜賞を授与された。これらの出来事が起きた大正の蘇峰の生きる支えともなったものは、修史『近世日本国民史』の執筆と、漢詩を愛し、稀少本を復刻し、世に残したいと願う文学者、ジャーナリスト蘇峰であった。

今回の展示は大正編であるが、大正時代を学ぶ基礎的な勉強の展示として御覧いただきたい。

女性の手紙

岡本かの子（一八八九〜一九三九 明治二十二〜昭和十四）東京生れ

大正・昭和期の歌人 小説家 岡本一平の妻、岡本太郎の母

九条武子（一八八七〜一九二八 明治二十〜昭和三）京都生れ

大正時代の歌人 大谷光尊の次女 男爵九条良致と結婚 仏教婦人会長等

各種の社会慈善事業に尽力、才色兼備の歌人として知られた

杉田久女（一八九〇〜一九四六 明治二十三〜昭和二十一）鹿児島県生れ

俳人 本名久子 お茶の水高女に入学 画家杉田宇内と結婚 「ホトトギス」同人となる 句風はすこぶる自己高揚的、情熱的で、また雄渾の趣を示し、ともすれば台所趣味におちいりがちな女流俳句の中で、異彩をはなつた 句集には『杉田久女句集』、文集に『久女文集』などがある。

下田歌子（一八五四〜一九三六 安政一〜昭和三年）

明治期の女子教育者 実践女学校を設立 明治の紫式部と言われる

大石順教（一八八八〜一九六八 明治二十〜昭和四十三）

京都仏光院の尼僧。十七歳の時に義理の父に両手を切り取られ、以後口に筆を加えて、絵や書を書く、社会事業に尽くす。

展示美術品軸物

○蘇峰揮毫 漢詩（軸）

報国文章

至所期斯

心肯要壘

人知白頭

唯刺看山

興獨對美

蓉賦小詩

丙子仲夏

蘇叟七十四

訓読

報国の文章 期する所に至る、

斯の心肯へて世人の知るを要む。

白頭唯刺す看山の興、

獨り芙蓉に對して小詩を賦す。

丙子 仲夏 蘇叟 七十四

丙子は昭和十一年（一八三六年）

時に蘇峰は七十四歳

大意

お国のお役に立ちたい一心でジャーナリストとしての道を歩んできたが、私の目標は達成し得たと思ふ。せめてその意図、志なりと世の人々に判つて欲しいものだ。

白髪翁となったいまの自分に、残されたものはかの陶淵明が悠然として

南山を見て打ち興じた境涯のみ。よってひとり芙蓉の峰（富士山）に向か

ひ合つてこの詩を詠んだやうな次第

平成十二年三月三十一日発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団

〒二五九〇二三 神奈川県中郡 宮町二宮六〇五

TEL 〇四六三二一七一一〇二六六

FAX 〇四六三二一七一〇六七七

蘇峰堂便り

開国以来、欧米列国に追いつこうとひた走った明治の日本。昨年の特別展はその志の高い明治の書簡展であったが、今年には「大正展」。十五年間の大正時代を、大正ロマンの美しい季節のように思うのは、多分に、文学からくる印象だろう。

この時代、世界情勢も国内情勢も大きく動いていた。大正三年、第一次世界大戦勃発。元老井上馨は「欧州大戦は大正新時代の天佑」と発言し、大正政変から続く政局の打開や、日本の国際的地位向上の機会と捉えた。確かに大戦は日本経済を好景気に導いたが、それは資本の独占化を進め、一方では、物価高による一般市民の生活の圧迫を招いた。米騒動など大衆行動が自然発生し、やがて吉野作造唱える民本主義思想が大正デモクラシー指導理論となり、護憲運動や社会運動へと広がっていった。

大正五年一月、吉野作造は『中央公論』に「憲政の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」を発表。同じ年の四月―十二月、河上肇は大阪朝日新聞に『貧乏物語』を連載。吉野の理論は政治運用面で民主化をはかることにあり、河上は政府の社会政策と共に、「人心の改造」が必要であるとするとしたのであった。思想家、文学者、美術家たちも「個人の精神の変革」を提唱し、理想郷を築くことを主張する。「人の心の改革」は今の時代にも論じたい問題である。

この様な社会状況の大正期、蘇峰は、弟蘆花との断絶、両親や次男萬熊との死別、震災による社屋の倒壊、自身の病など、人生の悲哀の中にあつて、『近世日本国民史』の起稿を始め、精力的な執筆活動を続ける。

今回の「大正展」からも、蘇峰の交流の広さを実感する。そして、その交流の広さの中で、今まで識ることのなかった歴史に出会うこともできた。痛感することは、歴史を学ぶことの大切さである。国際化社会の中で今、日本が如何にあるべきか、今後どの様に進むべきか、その方向を勇気をもつて示していく為にも、この国が歩んできた歴史を識ることは大切だと思う。それは蘇峰が願った「自主日本」の道であるかもしれない。

和田 千枝

私にとって五回目の特別展の展示替えは、「大正」という時代を再認識することから始まった。「明治」は大好きな時代であり、「昭和」は生まれ育った時代である。では「大正」はと考えると、ロマンやデモクラシーぐらししか頭に浮かんでこない勉強不足の自分にあきれたが、逆にその認識不足が大正という時代に興味を覚えさせたのである。蘇峰が明治に必死に紡ぎ育てた様々な人々との交遊が、大正という土壌の中で花を開き、根を張っていく。そんな様子が展示書簡からも見て取れた。そして一番強く感じたのは、大正という時代の中で「動く」「書く」「見抜く」蘇峰のリアルな姿である。

展示替えをひかえた一九九九年十二月のある日、ミレニアムのお祭り準備で大騒ぎの中、私は大変貴重な機会を得た。蘇峰が明治・大正と住んだ青山南町に、記念館の高野静子学芸員と蘇峰の六女鶴子様をお訪ねしたのである。

玄関で迎えて下さった鶴子様は、九十三歳とは思えないほどお元気で、背筋のピンとのびた「明治の女性」であった。蘇峰の家があった土地に建つマンションの四階の窓から見える景色は、恐らく当時とはだいぶ様変わりしたのであるが、鶴子様のいきいきとしたお話は、時代が一気にさかのぼり、その空間ごとタイムスリップしたかのような錯覚さえ起こさせた。当時の蘇峰がまるで活動写真をみているかのように、鮮明に脳裏に浮かぶのである。必死でメモを取る私の視界のその先に、「動く」「書く」「見抜く」蘇峰の姿があった。一日に必ず時間を決めて執筆する姿、考え事をしていて何度も電信柱にぶつかる姿、壮士に狙われても活動する姿、今まで著書や書簡で触れ合ってきた平面的な印象が、より肉付けされ、リアルで立体的な蘇峰のイメージが変わっていったのである。

今回の展示準備をしながら、私が感じた生き生きとした蘇峰像は、こうしただすばらしい体験からきたものであった。大正の蘇峰と平成の私、あの青山の鶴子様のところでは、確かに時を越えて同じ空間に存在していたと思ふ。

宮崎 松代

徳富蘇峰記念館のホームページを記念館から発信することになり、ご覧になった方から、さまざまな反響をいただいている。記念館発行の書籍『徳富蘇峰宛書簡目録』や学芸員高野静子著の『蘇峰とその時代』『続蘇峰とその時代―小伝鬼才の書誌学者島田翰他』はE-mailでの注文にも応じている。

ホームページURL <http://www2.ocn.ne.jp/~tsoho/>
E-mail tsoho@peach.ocn.ne.jp

平成十二年度 展示書簡一覽表

あ	奥田 義人 T・5・4・14 尾崎 行雄 M・37・2 小田幹次郎 T・5・1・19	坂谷 芳郎 T・4・6・8 下田 歌子 M・34・4・25 島崎 春樹 S・13・12・27 嶋田清次郎 T・12・3・17 T・14・4・22 T・14・9・28 T・5・1・16	な	内藤 鳴雪 T・13・6・25 永井柳太郎 T・11・5・4 永田秀次郎 S・12・5・5 長与 専斎 M・()・10・30 長与 又郎 S・9・9・6 長与 善郎 S・9・3・30 新島 襄 (軸) 野田卯太郎 T・5・10・20	ま	牧野 伸頤 T・14・4・7 松岡 映丘 (軸) 松岡 静雄 T・()・1・25 松方 正義 T・5・1・17 三上於菟吉 S・12・6・12 三宅 安子 T・15・2・21 本野 一郎 T・7・4・24 森 鷗外 M・23・9・29
明石元二郎 T・2・1・27 T・5・2・11	か	柴田 家門 T・5・1・16 下村 海南(宏) () () () 杉田 久女 S・9・11・27 西園寺公望 (軸) 迫 源次郎 T・5・1・19	は	野田卯太郎 T・5・10・20	や	八代 六郎 T・5・1・17 柳田 国男 T・3・2・16 山縣 有朋 (軸) 湯浅 倉平 S・11・2・1 横井 小楠 (軸) 与謝野 晶子 T・(10)・12・17 与謝野 寛 T・12・7・5 吉野 作造 T・4・9・25 T・5・6・21 吉屋 信子 T・14・4・15
秋山 真之 T・5・1・17	嘉悦 孝 T・13・9・20 賀川 豊彦 T・15・5・3 賀川 はる T・10・8・7 柏井 園 T・4・5・5 上山満之助 T・4・1・26 勝 海舟(軸) M・24 晩秋 桂 太郎 M・38・9・5 加藤 高明 巻物 M・30年代6通 ロンドン・パリから	た	橋本 関雪 T・7・6・24 長谷川好道 T・7・6・24 長谷川時雨 S・11・5・4 馬場 恒吾 T・()・7・31 原 敬 T・5・3・24 平田 久 T・5・1・14 平塚らいてう T・15・10・6 人見一太郎 T・5・1・20 平福 百穂 (軸) 深尾須磨子 T・()・9・13 福田和五郎 T・5・1・12 福知源一郎 (軸) 古谷 久綱 T・5・1・12	は	八代 六郎 T・5・1・17 柳田 国男 T・3・2・16 山縣 有朋 (軸) 湯浅 倉平 S・11・2・1 横井 小楠 (軸) 与謝野 晶子 T・(10)・12・17 与謝野 寛 T・12・7・5 吉野 作造 T・4・9・25 T・5・6・21 吉屋 信子 T・14・4・15	
阿部 充家 T・3・11・17	金子堅太郎 T・5・1・19 菊池 寛 T・12・3・8 木村 莊太 S・14・ 清浦 奎吾(軸) S・21・9・23 九条 武子 T・()・4・21 小池 国三 T・13・9・12 兒玉源太郎 M・32・8・16 後藤 新平(軸) T・5・2・15 近藤 廉平 T・5・1・28	高橋邦太郎 T・5・11・20 齋田 穆陰 T・11・11・12 竹友 藻風 T・()・8・1 立花小一郎 T・5・1・22 橋 瑞超 M・45・6・6 田中 義一 T・5・2・4 鶴見 裕輪 T・15・11・22 寺内 正毅 T・5・8・20 T・7・6・20 徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	ま	若槻礼次郎 S・3・11・11
有吉 忠一 S・8・7・()	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
家永 豊吉 M・32・5・14	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
伊沢多喜夫 S・12・5・5	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
石井菊次郎 () () ()	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
石井 たつ T・5・1・24	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
石川三四郎 T・9・3・13	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
石黒 忠憲 M・() () ()	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
伊集院彦吉 T・4・5・25	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
井上 通泰 T・4・1・17	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
岩永 裕吉 S・5・5・16	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
上田 恭輔 T・15・10・4	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
上田 敏 T・5・1・14	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
浮田 和民 T・13・9・20	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
内村 鑑三 T・7・7・18	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
内田 康哉 T・42・9・4	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
海老名 正 M・29・8・20	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
大石 順教 S・12・7・13	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
大隈 重信 S・10・4・2	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
岡本かの子 S・10・4・2	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11
沖野岩三郎	さ	徳富 一敬 (軸) 徳富健次郎 M・42・8・23 徳富猪一郎 (軸) 徳富 萬熊 M・40・7・28	な	野田卯太郎 T・5・10・20	や	若槻礼次郎 S・3・11・11

編集後記

○徳富蘇峰記念塩崎財団の設立代表者で理事の小林与三次先生が平成十一年十二月三十日亡くなられました。記念館の存続を願ひご助力下さいましたことは、二十年間変わることなく続き、日本テレビ役員会議室を毎年の総会に御提供下さいました。理事長竹越夫妻・渡辺政子評議員と築地本願寺にお見送りに参りました。

○「早春の二宮 歴史・花めぐり ウォーキング」という催しが二〇〇二年二月十一日にありました。みなさん十二キロを歩いて、最後に蘇峰記念館に着き、梅の香・水仙の香に疲れを休めていらつしやいました。この催しで、梅林に千二百人、記念館に百十一人入館いただき、記念館の記録を作ってくれました。二宮の駅の方々、駅長さん始め町長さん役場の方々とも親しく楽しい一日でした。

○今年新聞各紙が徳富蘇峰記念館の梅林を報道下さり、宣伝効果の大きさを実感しました。来年もよろしく願ひいたします。

○昨年の秋、蘇峰先生の末娘鶴子様を、蘇峰先生のお孫さんのルリ子様のご案内でお訪ねしました。明治三十九年七月のお生まれで九十四歳であられ、青山時代の楽しかった思い出を語って下さいました。鶴子様は、明治四十一年から大正三年まで蘆花の養女でいらつしやいました。蘆花からは、美しいと感じる心を大切にしようといわれたそうです。糟糠の妻とは、蘇峰の妻静子に使う言葉で、蘆花の愛子夫人には使われない、と茶目っ気いっぱいにお話し下さいました。明るいペランダにもお部屋の内にも植木鉢の花が活き活きと咲き、熱海の晩晴草堂の蘇峰先生ご愛用の籐の安楽椅子が、日光を受けていたことを思い出しました。蘆花の「みみずのたはごと」は最初、「いもの葉のたまねき」とどちらがいいか、蘆花は迷っておられたそうです。どちらも面白い題だと思ひました。蘇峰流の温かさが鶴子様脈々と流れているように感じ姪の松代と感激して帰りました。

○目録(十七)から、職員の方崎さんと和田さんにも分担して書いてもらうことにしました。

○三百年の老梅は樹皮一枚でがんばって咲いています。見上げる青空に白い梅の花はよく似合います。若い梅も老梅も同じように美しいのはなぜでしょう。(高野静子)